日体大理事長 松浪健四郎モノ申す

地方再生・創生論 232

美術館、博物館の価値を認識すべきだ

どの自治体にも公民館と図書館が設置されている。利用頻度も高く、住民にとって必要不可欠な施設である。幼児から高齢者まで、文字通り全住民が利用できる施設だ。私の育った町では、小中学生の絵画コンクールは公民館で開催されていた。人気高い催物、多くの住民が鑑賞のために訪れていた。

余裕のある自治体は、町立か市立かはともかく、公立の美術館を設けている。公民館や市民ホールの一角であったりもするが、美術館を設置する自治体には敬意を表したい。図書館には「司書」なる資格を持つ人材を配置しなければならないように、美術館や博物館には「学芸員」を置く必要がある。この人件費がネックなのか、美術館を持つ自治体は多くはない。残念なことに、自治体は住民の美意識を高めようとする装置には無関心なのだ。

自治体の首長選挙や議会選挙で「美術館を造ります」「博物館を造ります」と演説会で述べた候補者を私は知らない。選挙の票にはならないと決めつけているかに映る。人の心を養う教育の場たる美術館や博物館、また、人間的な出会いの場ともなる。文化を担うにとどまらず、子どもたちの情操を養う大切な場ともいえる。「感動」「驚き」を教材にして、心を耕す場なのである。道徳を教えるのも重要だが、感動できる心を保持すれば、つまらぬいじめ問題等も消失するに違いない。

私の知人である会社経営を東京・世田谷でする志賀則男氏は、私財を投じて北海道札幌市に障がい者のための「美術館」を設置した。有名、無名を問わず、障がい者たちの作品を収集している。障がい者たちにすれば、大きな目標ができた上に、意欲を高めるビタミンになっている。障がい者たちにも、優れた感性や技術を持つ人たちも多くいる。その人たちの専用美術館、ぜひ足を運んでほしいと願う。

さて、明治維新政府は、多くの学者や技術者を外国から雇い入れた。大森貝塚を発見し、日本の考古学の1ページを開いたエドワード・モースは、滞在中に日本人の用いる道具を収集した。主に日用品や農具で高価な品々ではなかった。彼は海の魚介類の専門家だったが、帰国時に収集品をアメリカへ持ち帰った。シカゴのモース記念館で展示されているが、すでに日本では失ってしまった品々で、貴重な資料となっている。保存の重要性を教えられる。

美術館、博物館、資料館、参考館、さまざまな貴重な施設は住民の宝だが、自治体にすれば、その経費に音を上げる。収集品の費用を考慮せず、まず住民の協力や寄付によって作品を集めるがいい。無名の作品で十分だし、子どもたちの作品だって有意義であろう。人間の根幹をなす情操を育むために工夫すればいい。私たち日本人は、作者が有名であるかどうかを重視するが、それは間違っている。無名であっても、作品の持つ美しさは魅力的である。志賀則男氏は、障がい者たちに夢を与えることからスタートしたが、地方の自治体も背伸びせずに金をかけずに作品を収集すべきだ。

学芸員の企画力に驚かされたことがある。横浜市の多くの寺から仏像を借りた、その展覧会に行った。超一流の有名な仏師の仏像はなかったが、古い時代から信仰の対象とされてきた一体一体の仏像は、見る者を美の世界へと引き込んだ。美術館を学んだと文化の重要欠な施設でかかる施路を造るのがあることである。首員たちも、む大切さをらない。こ場は、目に生むもので域の魅力のがったり、なる可能性

ともかく徴を伝える民の文化力である。地少子化で学っていたり用を考えれ術館や博物造ることが芸員」は、を募ればど